

アジアと太平洋の未来について

世界において多様性を受け入れてきたアジアの歴史に学ぼうとする動きがある。とりわけ日本とインドが歩んできた道のりには多くの知恵やヒントが隠されている。川勝知事とラジモハン・ガンジー氏、そして国際IC日本協会会長及び経済人コー円卓会議日本委員会会長の矢野弘典氏が「アジアと太平洋の未来について」語り合った。



(公社)国際IC日本協会会長
経済人コー円卓会議日本委員会会長

矢野弘典氏 やのひろのり

平和活動家
歴史家・元上院議員

ラジモハン・ガンジー氏 Rajmohan Gandhi

静岡県知事

川勝平太 かわかつ へいた

アジア的な価値観で世界を平和に

矢野氏 本日のテーマは「アジアと太平洋の未来について」です。このテーマを論ずるにあたって、もつともふさわしいお二人をお招きしました。ラジモハン・ガンジー教授と川勝平太静岡県知事です。では、全体のアウトラインを川勝知事にお願ひします。

日本とインドの多様性から学ぶ
知事 尊敬する矢野会長、今日は経済人のコー円卓会議にお招きいただき、ありがとうございます。また、敬愛するガンジー先生とご一緒することができ、誠に光栄です。

さて、近代において私たちは「日本にとってのインドの意味」、あるいは「インドにとっての日本の意味」を見過ごしてきたのではないかと思います。例えばアメリカの南北戦争には奴隷解放戦争という面があります。南部の奴隷が作っていたのは綿花です。アメリカが内乱になって、イギリスはアメ

リカ綿花の輸入ができなくなり、インドに綿花栽培を奨励しました。しかしインド綿花は短繊維でイギリスの紡績機械に合いません。インド綿花を大量に輸入したのが明治日本の紡績業です。日本はボンベイの紡績工業を追いかけて産業革命を成功させ、アジア最初の工業国家として登場しました。インドが日本の工業化を支えたのです。これは見過ごされてきた一例ですが、日本人は、人類の巨大な知恵袋でもあるインドから未来をつくる力を学ぶべきだと思います。

ガンジー氏 川勝知事はインドのことをよく知っておられる。知事であり、学者であり、そして行政官であられる。世界のことに関心を持たれるお二人と同じテーブルに座っていることを嬉しく思います。

今日一番言いたいことは、日本とインドと中国の3カ国が共に世界の先頭に立つてリードすべきだということです。3

少し散策をしました。そして日本の国は今、どういう目的を持っているのかなと思えました。世界における日本の今日の役割は何か。それを日本はどうやって探していくのか。
知事 日本の中には東洋の生んだ人類の価値、西洋のつくりに上げた近代的な価値が生きています。意図したわけではありませんが、二千年の歴史を経て、日本人の生活には東洋的価値も西洋的価値も息づいています。したがって、これからの日本の役割は、いかにして東洋と西洋から学んだものを世界へお返しするか、ということですね。

けないと言われてきました。今はカーストの外で結婚をして、子どもが生まれて、ミックスされた社会になっています。これは異なった人々が共生できる見本だと思います。それをインドはうまく学べていませんが、世界に発信できることは多いと思います。

その価値を一言で表すとすれば「和」ではないかと思えます。多様な存在を調和させる。多様な和です。和の価値をどのようによれば、世界のために生かすことができるのか。それを考えることが現在の日本の課題ではないかと思えます。

例えば殺してはならないというルール。インド人は必ずしもルールに従ってきませんでしたが、そういうことでは、日本人のほうが素晴らしいと思えます。共生して一緒に働く。でも、インドも努力をして、その理解を深めようとしています。日本、中国、インドでどのように調和を持って共生できるのか、そして宗教や経歴の違いといったものを乗り越えられるのかということも探るべきだと思います。

ガンジー氏 インドにはたくさん民族、そして宗教が存在しています。そのインドでは200〜300年前まで、カー

スト内で純血を保たなくてはならないというひどい行いがある。一つの宗教に結び付けるのは馬鹿げたことです。イスラム教徒の中にはキリスト教やヒンズー教徒と同じように素晴らしい人がたくさん

カ国が共により良い世界をつくれれば、ヨーロッパが今までやったことに勝るのではないかと思います。

私は1957年に初来日し、日本に対する尊敬、そして心を許せる関係を築くことができました。改めて1962年に来ました。それは中国とインド間に紛争があった直後でした。私は日本を近くに感じていました。日本と中国がそれぞれ違う歴史を持つているということも知っていました。ですから、日本にインドをサポーターしてもらい、中国をやっつけようと思ったわけです。その際、元首相の石橋湛山さんと会い、日本にインドをサポーターしてくださいと言ったわけです。すると、石橋さんが「なぜですか」と。「日本は中国の友でもあるのですよ」と。これは大きな発見でした。インドと中国と日本は一緒に働かねばならない。それは石橋さんからいただいた一つのメッセージでした。昨夜日本に到着して、今朝は

んいます。ヒンズー教とイスラム教は戦うべきではありません。平和裏に共生する必要があります。日本・中国・インドはそういうことを学び、そしてその学びは世界中と共有できるはずです。

アジア的な価値とリーダーシップ

矢野氏 1年前、経済人コー円卓会議でアジア的価値観とは何





(公社)国際IC日本協会会長
経済人コー円卓会議日本委員会会長
矢野弘典氏

(一社)ふじのくにづくり支援センター理事長、(公財)産業雇用安定センター会長、(株)ADES経営研究所社長、(株)ADEKA社外取締役、国際的なボランティア活動として(公社)国際IC日本協会会長、CRT日本委員会会長も務める。東芝欧州総代表兼ヨーロッパ社長、日本経済団体連合会専務理事(旧、日本経営者団体連盟)、中日本高速道路会長CEOを歴任。

おりです。彼はヒンズーとイスラムの間に友情と友好をつくろうとしました。そして、正義と平等をインドの社会に築こうとしました。私は、リーダーシップの1つのテストは、最も難しい問題を自分の力で解決するかどうかだと思えます。

リーダーシップに関して、あと2つ言えると思えます。1つは、ほかの人にも成功してほしいと願うことです。祖父はネルー、パテルといった有名な政治家たちと友好を持ちました。自分の仲間が強くなったら、自分も強くなると思つたのです。ですから、同僚を偉大にしようと一生懸命に尽くしました。つまり、祖父はチームを強くできる人でした。

また、祖父は良心に従おうと

思いました。誰を喜ばせたいのか。誰に対して責任感を持つのか。そうではなく、自分の良心に答えられることでなければなりません。自分の良心の声を傾け、それに従おうということです。独裁者の前にひざまずくことはしない。自分の良心に対してだけ自分にはひざまずく。これもまたリーダーシップだと思えます。

知事 私にとつて良心に従うとは、富士山に向かつて己の心で恥ずべきことがないか。恥ずかしくないのであれば、それで良く、己の信念を、情理を尽くして説明し、貫くということです。

自戒は、公務において身に私を構えない。心は素直に、うそ偽りを言わない。上にへつらわらない。下に威張らない。常に礼節を

失わない。人の患難は見捨てない。恥ずかしいことはしない。信念は曲げない。ものあわれを知り、人には情をかける。

リーダーシップの可能性は一人ひとりの中にあります。「俺がリーダーになる」という自己顕示ではなく、徳を持つ人には人が寄つてきて、おのずとその人をリーダーに持ち上げます。「徳は孤ならず」といいます。マハトマ・ガンジーもそのお一人でした。そういう生き方をすれば、誰もがリーダーになれると考えています。

ガンジー氏 世界で必要なリーダーシップの側面として、もう1つ必要なのは、敵対する者と和解できる能力です。つまり、人を束ねる能力です。

罪を犯した者、またその関係

者は、過ちが行われたということとを認めなくては行けない。一方、被害者の子孫たちは、可能であれば許して、忘れて、将来を見ることが必要です。その2つが一つの形であり、リーダーシップの1つの形であると思えます。私はぜひ皆さんにこういったことを奨励し、考えていただきたいと思つています。

矢野氏 今日はありがとうございます。お二人に絶大なる拍手をお願いします。

ガンジー氏、知事 ありがとうございます。



平和活動家・歴史家・元上院議員
ラジモハン・ガンジー氏
Rajmohan Gandhi

1935年、マハトマ・ガンジー (Mahatma Gandhi) の孫としてニューデリーに生まれる。国際IC運動の世界的指導者。ジャーナリスト。上院議員、イリノイ大学教授、桜美林大学名誉博士を経て、現在インド工科大学カラグプール校客員教授。長年に亘り、インドーパキスタン、ヒンズー教徒ーイスラム教徒間の和解に努めてきたが、2001年9月11日のアメリカの同時多発テロ以来、西洋とイスラム世界の溝を埋めるための活動にも力を尽くしている。



静岡県知事
川勝平太

1948年生まれ。早稲田大学、同大学院をへて英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などをを経て2009年静岡県知事。現在2期目。

か、ということ議論しました。そのときに、いくつかの要素を皆で発見しました。その第一が、ダイバーシティを受け入れる世界観の存在です。多様性を受け入れる寛容さです。

第二に、地域社会に根ざした固い絆の世界観です。人々は、自然災害や飢餓などを乗り越えて生きていくために、地域社会でお互いに助けあいながら、自然と共生し、その中で豊かさを育む文化を築き上げてきました。

第三に、日本人の心に宿る道徳観の存在です。これはリーダーシップという形で表れてくると思えます。茶道、書道、華道、あるいは武道を究めていくことを美徳とする発想は、人が私利私欲に没頭せず、謙虚さや徳性を兼ね備えた、才徳兼備のリー

ダーシップを求める気風を育ててきました。

第四に、東洋と西洋の価値観の融合を図る必要があります。日本において伝統的に引き継がれている思想は、欧米的な白か黒かのアプローチではなく、異なる文化や習慣を持つ者同士が違いを尊重しつつ協働する総体的あるいは包括的なアプローチであると考えます。

知事 いずれももつともです。特にダイバーシティ多様性の和について言えば、たとえば、白か黒かではなく、中間の灰色にするのではなく、白も黒も大事、その間にある色合いもみな大事だということです。白は白として、黒は黒としてお互いを際立たせるために大切な存在と考えるべかられません。ドミソの和音

は一言に聞こえますが、よく聞くとド、ミ、ソのそれぞれの音も聞こえます。このように個々を認めつつ全体を和にする姿勢が大切です。

矢野氏 アジアと太平洋の未来を考える上で、リーダーシップに焦点を当ててみたいと思います。

世の中は、さまざまな要素が絡み合いながら動いています。従つて、国と国、人と人との間に発生する多くの摩擦の原因も複合的であります。こうした問題を解決するには、優れたリーダーシップが不可欠です。

私は土光敏夫さんをはじめ、優れた本物のリーダーから多くの薫陶を受け、それが一生の財産となりました。そうした本物のリーダーの特徴を一口で

言えば、東洋が古来培ってきたリーダー像、「才徳兼備の人」と表現することができると思えます。知性や才能はリーダーの必要条件ですが、それだけでは人は付いてきません。徳性を備えた人物であることで、多くの人々の協力を得て、事を成し遂げることができると思います。

倫理観を持ったリーダーシップこそが、企業のみならず、国や社会の持続可能性を高めるのだと思えます。

さて、両先生は現代のリーダーシップの質についてどのようにお考えでしょうか。そして、その質を高めるにはどうしたら良いとお考えでしょうか。

ガンジー氏 祖父のマハトマ・ガンジーがインドの独立運動を担ったことは皆さんご存じのと